

5. 主に脳性麻痺の診断における traction test の意義について

整肢療護園小児科

児 玉 和 夫

1 目 的

Traction test (ひき起し検査)は、旧くより乳児発達診断検査として広く行われている手技である。その方法や評価法は様々であるが、顎定の程度の判断に用いられることが多い。従って主に生後3-4カ月での乳児検診で多用される。しかし、この時期にはまだ顎定が進んでいない児も無視し得ない割合でいるし、その多くは正常な児であり、この反応のみでは多くの情報が得にくいように見える。その評価方法も一定せず、本法は発達異常児診断の一スクリーニング手段としての価値を出ていなかったのではないか。

一方Vojtaは、脳性麻痺になる可能性のある児(中枢性協調障害児=ZKS児)の診断スクリーニング法として7つの姿勢反応を組み併せ、この方法によって新生児期からでも重症度の判定を含めたスクリーニングが可能であるとした。彼の方法におけるTraction testは、単に顎のコントロールの程度ではなく体全体の反応をみるものである。手技は、検者の手指を児に握らせるようにして背臥位より児をひきおこし、背中が床より45°の勾配になるところで止め、全身の反応をみるものである。彼はこの反応の発達を5段階に分類している。第I相では首は後に垂れ、下肢はゆるく外転屈曲しており、無反応に近い。第II a相では、背中ほぼ真直ぐに保持され頭部はこの背中の線までおきる。第II b相では頭部は背中の線より前迄屈曲してくる。同時に下肢はII a-b相を通じ次第に強く屈曲してくる。第IV相では下肢はゆるく外転伸展したままで上肢のひき、と上体・頸部の積極的なおこしでスムーズに坐位までいこうとする期で第III相はこの中間にあたる。

本研究の目的は、従来の顎定判定の検査をも兼ねてVojta法によりTraction testを行った場合の判定基準をつくることと、本方法がどれだけ脳性麻痺(正確には中枢性協調障害児)の診断に役立つかを検討することにある。

2 方 法

顎のおき方の程度判定のために、正常分娩満期・適正体重・危険因子を特に有しない児を新生児期、生後1カ月、3カ月及び以後1カ月毎に検査し、これを8ミリカメラで記録し後で分析を行った。同時に他の姿勢反応と発達チェックを行った。(総数23例)。脳性麻痺のスクリーニングのためには、整肢療護園受信乳児の記録を基にして分析を行った。(総数500例)

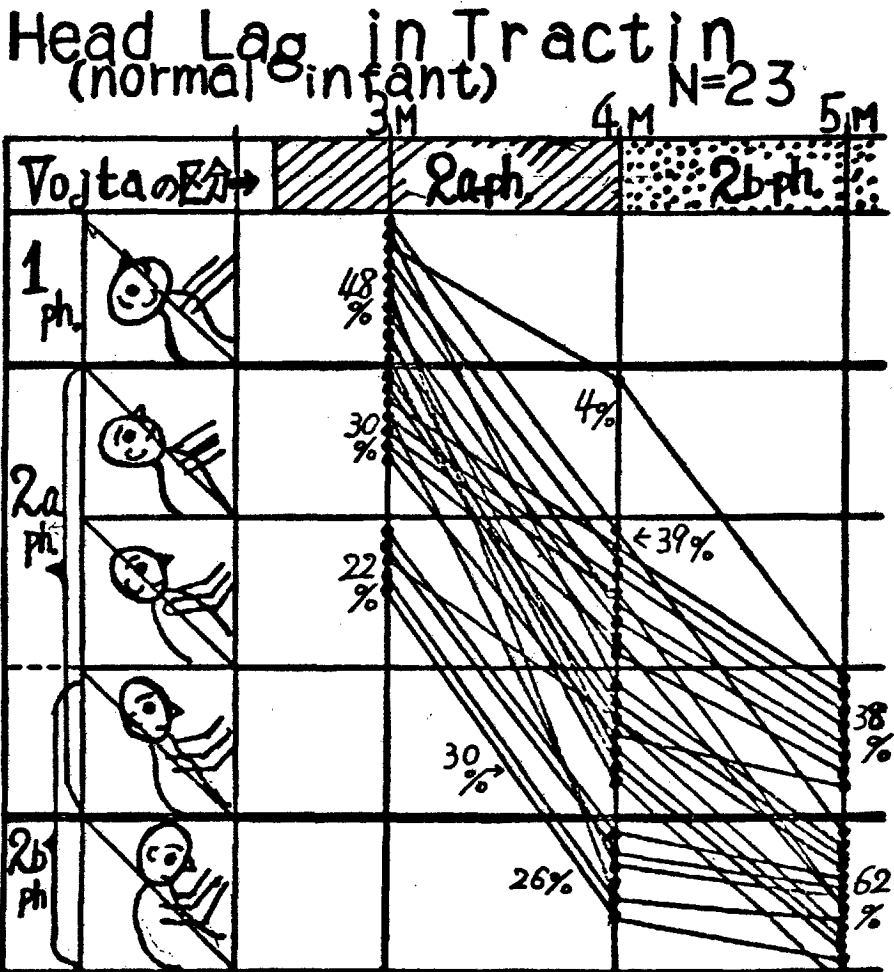
3 結 果

顎のおき方の程度の発達についての結果を図に示す。上にVojtaによる発達区分を示し左に我々の例での発達を示した。結果として、3カ月段階ではまだ48%の児がI相にあり全例がII a相となったのは満4カ月であった。

又、全例がII b相となったのは満5カ月であり、Vojtaの原基準より約1カ月近くの遅れをみている。

中枢性協調障害の診断としては、本法を注意して用いれば非常に役に立つ。何よりも、容易に行え

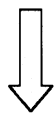
しかも安全であることがよい。しかも単に頸の反応だけではなく、全身の反応と発達をチェックし得るし鋭敏でもある。正常児でも乳児期初期にはVojtaの記述に反して他の姿勢反応(例えばCollisvercicalやVojta)では下肢が屈曲すべきときでも伸びたままのことが多いが、本法では注意すれば曲ってくる。逆に強直性麻痺の軽い場合、本法で軽く尖足伸展を示し、他の反応ではっきりしない例もある。片麻痺での左右差、アテトーゼ児での後ろ反張等かなりの例で異常の指摘に結びつく。しかし、一方本法で正常児が一見正常とは異なる反応を示すこともある。これらの点をほぼ正常の妊娠・分娩経過の20例でみてみた。一応乳児検診の為ということで新生児期(生後1週間以内)と生後1, 3, 4カ月目をチェックしている。以下のような点が問題となった。①ATNR(非対線性緊張性頸反射)の影響——生後4カ月においても注意して体のねじれを防がないと、この影響が出現し(特に頭を斜め後にひくと)顔面側下肢の伸展傾向が出てくる。——約30%が0~4カ月の間に1回はこの反応をよく示した。②頭をそり返らせると下肢は伸展しやすくなる。③泣くことはこの①と②を増強させる。泣かないでも興味が散ると正確な反応は引き出せないなどである。ほとんど全例以



上の条件下では一時的にせよ下肢の伸展や非対称を誘発し得ている。4カ月目ではやや減ずるが、それでも特に後に頸がそりがちな児には多い。必ず泣かない時に正中位に保ち、理想的には検者と児の眼をあわせて行うべきである。この点をよく守らねば、本法の有用さも半減しよう。

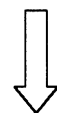
4 要 約

Traction testを乳児検診で用いられるよう、正常児群での頸の反応時期を点検した。Vojtaの原チャートより1カ月遅いようである。異常反応の一部を述べると共に、検査手技上の注意を述べた。本法を広く用いてもらうためには、異常反応についての検討が必要であるが、次回の検討としたい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1 目的

Traction test(ひき起し検査)は、旧くより乳児発達診断検査として広く行われている手技である。その方法や評価法は様々であるが、頸定の程度の判断に用いられることが多い。従って主に生後3-4カ月での乳児検診で多用される。しかし、この時期にはまだ頸定が進んでいない児も無視し得ない割合にいるし、その多くは正常な児であり、この反応のみでは多くの情報が得にくいように見える。その評価方法も一定せず、本法は発達異常児診断の - スクリーニング手段としての価値を出ていなかったのではないか。